

イギリスの学生服産業に関する一考察

—— サプライチェーンの観点から ——

小宮 一 高

I. はじめに

本稿の目的は、日本の学生服産業との比較を通じて、イギリスの学生服産業の特徴を検討することである。特に注目するのは、イギリス学生服の販売価格の安さである。後でも確認するように、イギリスの学生服の価格は日本の学生服の価格の約1/7であり、両国の学生服には、かなりの販売価格差が存在している。なぜ、イギリスの学生服は、日本に比べこれほど安価なのだろうか。

学生服の販売価格差には、多くの要因が影響していると考えられる。学生服は、教育と密接に関係しており、その国の文化や歴史の影響を強く受けることが予想される。また、広く学生が使用する製品であるために、消費者の所得や国の政策にも影響を受けるだろう。本稿では、このような多様に想定される影響要因の中で、学生服の製造に関わるサプライチェーンの特徴に注目し、両国の学生服の販売価格に差違が発生する要因を仮説的に検討する。筆者らは、これまでに日本の学生服産業に関する研究を2つ発表しており（浦上・小宮，2006，小宮・猪口，2009）、それらの研究の成果を活かしながら、上記の問題の検討を試みたい。

本稿の以下の構成は、以下の通りである。最初に、イギリスの学生服の歴史の概略について確認する。その後、現在のイギリスの学生服の特徴を、イギリス公正取引庁による報告書（Office of Fair Trading, 2012）に基づいて確認し、同報告書の調査等を用いて、日本の学生服との販売価格差を確認する。そし

て、そのような価格差が発生する要因について、サプライチェーンの特徴の観点から比較・検討する。最後に、本稿のまとめをおこなう。

II. イギリスにおける学生服産業の歴史概略

(1) イギリス学生服の源流⁽¹⁾

Ewing (1977) は、イギリスの代表的なパブリック・スクールであり、著名な学生服をもつイートン校 (Eton College) の学生服の歴史について取り上げている。これによると長い歴史を誇る同校は、1860年代ごろから学生に統一した服装をさせ、学生服を採用することになったという。

イートン校の設立は1440年であるが、長い間、学生服として統一的な服装を採用することはなかった。しかし、1860年代になり、若者の間でぴったりとしていない曲線的なジャケットが流行し、イートン校はその形の服装を学生服として採用することになった。その後一貫して学生服を維持するようになるのである。

その後、イートン校を真似た形の学生服がイギリス各地の学校で採用されるようになり、学生服の一般的な形ができあがった。典型的な学生服の装いとしては、ノーフォーク・ジャケット (ゆったりとしており、ベルトがあり、箱形のプリーツが前と後ろについている) に、膝下までのズボン (ニッカポッカ)、そしてブーツというものであったという。

また、Ewing (1977) によれば、イギリスにおける学生服定着の流れは、スポーツにもう1つの源流があるという。この時代、徐々にクリケットやサッカーといった組織的なチーム・スポーツが、パブリック・スクールや他の学校にも広まりつつあった。チーム・スポーツは、必然的にチームとしての服装、すなわち、ユニフォームを促す。チーム・スポーツ精神は、この時代の学校生活にとって非常に重要であり、当時の学生服は、ユニフォームの道徳的、あるいは、心理的な効果を強調していたという。

(1) この節の記述はEwing (1977) による。

(2) イギリス学生服の生産と販売⁽²⁾

Davidson (1990) によれば、2つの世界大戦の間の時期にあたる1920年代ごろ、イギリスの学生服はそのピークを迎えたという。その時期、学校の数は増加し続け、それらの学校の多くが学生服を採用したために、その需要は膨大なものとなった。学校側は、今の時代からすれば考えられないような多くのアイテムをリストとして準備していた。例えば、全寮制の学校であれば、6組の水着、12組の靴下、4組のパジャマ、といった具合である。そのため家族は年に数回、これらのアイテムの買い出しに出かけることになった。

その時期の学生服の供給の中心に位置したのが、ロンドンの百貨店や専門店である。ロンドンの主要な店舗で言えば、ジョン・ルイスやセルフリッジ、ハロッズといった百貨店であり、地方都市（例えば、リバプール）にも、その支店があった。また、特定の商品に特化した専門店も多数存在した。これらの店舗は、学校側の長いリストに沿った商品を供給するために、激しく競争していたという。

近年になると、学生服は綿からナイロン、ポリエステルへと素材を変え、丈夫なものへと変化した。他方で、ブレザーはややスリムになり、3つボタンから、2つボタンへと変化し、襟は小さくなり、多くのものは洗濯可能な素材になっている。

現在は、学生服の需要は減少し続けており、もはや高級なものとはいえなくなっている。学生服は、特別なものではなく標準化されており、多くの学校がそれを採用しているのである。販売場所も、百貨店や専門店だけでなく、テスコやセインズベリー、マークス&スペンサーなどのチェーンストアでも販売されるようになり、競争がさらに激化している。当然価格は、リーズナブルになっている。供給側は、協力関係になる製造業者と共同しながら、学校側の要求に従って、学生服の供給を巡る競争を展開している。

(2) この節の記述は、Davidson (1990) による。

Ⅲ. イギリス学生服の現況

(1) 現代のイギリスの学生服について

以上のように、イギリスの学生服は、19世紀の後半ごろからイギリスの各地で見られるようになったのであるが、その流れは確実に現代にまで受け継がれている。イギリスには、学生服に直接的に関わる法律は存在しないものの、教育省 (Department for Education) は、次に挙げるような学生服の効用を指摘し、学生服を採用することを勧めている。⁽³⁾

- ・積極的な行動と修業をサポートすること
- ・どのようなバックグラウンドをもつ生徒も歓迎されているという感覚を促すこと
- ・特定の服装をしなければならない、という社会的なプレッシャーから子供たちを守ること
- ・異なるグループの生徒間の結束を醸成し、よい関係を促進すること

事実、後でも取り上げる Office of Fair Trading (2012) が示す 2012 年の調査・報告によると、イギリスの小学校 (primary school: 4 歳から 11 歳まで) と中学校 (secondary school: 11 歳から 16 歳まで) の 79% の学校が学生服を指定しているという。

しかし先にも述べたように、日本の学生服と比べてイギリスの学生服には、販売価格に大きな差違が見られる。そこで以下では、イギリスの公正取引庁による報告書 (Office of Fair Trading, 2012) に基づいてイギリスの学生服制度の現況を簡単に確認した上で、同報告書の調査によるイギリスの学生服の販売価格と日本の学生服の販売価格と比較してみることにしよう。

(3) Department for Education, Popular questions, "Why do we have to wear a school uniform?"
<http://education.gov.uk/popularquestions/a005643/school-uniform> (2014 年 2 月 17 日閲覧)

(2) イギリス学生服の現況

この節で参考にするイギリス公正取引庁による報告書“Supply of school uniforms” (Office of Fair Trading, 2012) は、同庁が学生服市場におけるより一層の競争と、消費者へのより多様な選択肢の提供を目指して、イギリス（イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランド）の学生服市場の状況を調査したものである。特に注目しているのは、学生服の「制限的な販売（restrictive arrangements）」が、学生服の価格に与える影響である。

Office of Fair Trading (2012) が注目する学生服の「制限的な販売」とは、学校側が学生服を販売する場所を特定の店舗に指定（制限）することを意味している。具体的には、①特定の販売店（1店舗）での販売に限定する、②学校内で販売する、③特定の数の販売店に限定する、の3種に分けている。これらの制限的な販売が行われることによって、学生服を購入する保護者が競争による利益を得られないことが想定されるため、その実態を明らかにする、という点がこの報告書の趣旨である。

この調査はウェブ・アンケートによる学校側からの販売方針等の調査と、覆面調査員による販売価格調査からなっている。アンケートは、イギリスの中学校（secondary school）の全数と、全体の1/5に当たる小学校（primary school）に配布・回収されている。アンケートの対象数は8,623であり、回収数1,636、回収率約19%となっている。

本稿の目的に沿って、Office of Fair Trading (2012) の要旨の中から、主要な主張点を抜き出すと、次のようになる。⁽⁴⁾

- ・学生服を採用する学校の中で、およそ2/3（74%）の学校が学生服を購入する場所に制限を与えている。
- ・この結果、学生服を買い回ることのできない保護者は、£5から£10ほど多く支払っていることになる。一般的には、スーパーマーケットの価格

(4) Office of Fair Trading (2012) の冒頭にまとめられた要旨 (p. 4-10) の中から、本稿の目的に沿うものを抜粋している。

が最も安価である。

- ・制限的な販売をおこなっている学校の中の38%は、販売店の決定に際して選択の過程(selection process)を設けており、最も一般的な選択基準は、保護者が支払うコストであった。
- ・制限を掛けているアイテムは、中学校で4種程度、小学校で2種類程度であった。対象となる一般的なアイテムは、ネクタイ、ブレザー、スウェットシャツであった。
- ・制限を設ける理由として最も多かったのは、学生服の容姿(appearance)の一貫性を保つため、というものであった。

以上のように、イギリスの多くの学校では、販売場所に制限を設けており、そのような制約が課される場合には、制服の販売価格が高くなる、という調査結果が報告されている。報告書としては、学生服の一貫性や利便性を考慮する事情は理解できるものの、なるべく制限的な販売をなくし、保護者が少ない費用で学生服を取得できるように提言している。

(3) イギリスと日本の学生服価格の比較

次に、同報告書の覆面価格調査のデータを利用して、日本の学生服の価格との比較を試みよう。上記のように、イギリスの学生服販売には、一般的に販売場所の制限があり、販売場所によって価格が異なる。ここでの価格は、中学校(secondary school)の男子学生服を比較の対象とし、ネットでの販売を除いた調査価格の中央値をデータとして用いる。また、日本の学生服価格のデータは、総務省統計局「小売物価統計調査」による中学生男子学生服の価格を用いることにする。表1に比較の結果を示している。なお、日本の中学生女子学生服は同調査に記載がないため、参考としてイギリスの販売価格のみを示す。

表1によると、日本の男子中学生の学生服の価格は、イギリスの価格の約7倍となっている。調査対象年度となった2012年はポンドに対する円の価格が高騰していた時期にあたるため、通常以上に価格差が開いている面があるもの

表 1：中学生男子学生服の価格比較（2012 年）

	イギリス ¹			日本 ²
	中学男性 学生服	£34.01 (4,301円) ³	ブレザー	£22.06
	ズボン		£11.95	
中学女性 学生服	£41.70 (5,274円)	ブレザー	£25.28	-
		スカート	£16.42	

- Office of Fair Trading (2012) による Secondary school の学生服を対象とした調査による。価格は、覆面調査によって行われた少数サンプル調査の中央値。それぞれの調査対象数は、以下のとおり。男性ブレザー：31、男性ズボン：15、女性ブレザー：32、女性スカート：35。
- 総務省統計局「小売物価統計調査」による県庁所在地及び人口15万以上の市を対象にした調査の、詰め襟学生服上下の価格を平均したもの。調査期間は2012年の1から3月であり、対象は次のように定義される。「公立中学校用、詰め襟上下、〔素材〕「ポリエステル100%」又は「ポリエステル50%以上・毛混用」、〔サイズ〕身長160cm・A体型」。
- イングランド銀行 (<http://www.bankofengland.co.uk/>) による2012年の年次平均為替レート、£1 = 126.4694円による円換算。

の、イギリスと日本の学生服の価格には、大きな差が存在していることは間違いない。

IV. 日本とイギリスの学生服産業の比較

(1) 日本の学生服生産の特徴

以上のようなイギリスと日本の学生服価格の差違は、なぜ発生するのだろうか。これには様々な要因が影響していると考えられるが、ここでは、両国学生服産業のサプライチェーンの特徴の違いから検討することにしよう。

サプライチェーンの観点から見たときに、まず指摘できる両国の違いは、日本の学生服産業のサプライチェーンが製造業者主導なのに対して、イギリスの学生服産業は小売業者主導、という点である。

まず日本の学生服産業の特徴から確認しよう。小宮・猪口(2009)は、日本を代表する学生服製造業者(ここではA社とする)の学生服の生産と流通について記述している。その要点を示すと以下ようになる。

・学校側からの学生服の受注は、製造業者の営業担当者によっておこなわ

れ、その後、両者で詳細なデザインの調整がおこなわれる。

- ・学生服は、詰め襟・セーラー服とブレザーとに大別されるが、これらの主力製品の製造は、大規模な工場においておこなわれる。また、その製造過程において、いくつかの外注先に部分的な製造を委託する場合が多い。さらに、シャツやスカートなどの、学生服の他のアイテムは、製品の製造過程全体を他の製造業者に委託する割合が高い。
- ・製品の流通については、かつては代理店(問屋)を通すものが多かったが、近年は代理店の衰退が進み、卸売段階を自社の販売会社や直営の営業所が担う割合が高くなっている。
- ・学生服販売を担う小売店には、小規模で学生服販売を専業とするものの割合が高い。ただし、現在は百貨店やスーパーなど、大手小売業を販売場所とするケースも出てきている。

このように、日本の学生服の典型的なサプライチェーンは、①学校側からの生産の受注を製造業者がおこない、②外注先も活用しながらそれらを製造し、③販売会社等を経由し、専業の小規模小売店を通して消費者に販売する、という形が一般的であると考えられる。

このようなサプライチェーンの特徴をもつ日本の学生服産業は、非常に市場集中度が高く、上位企業による販売シェアが非常に高い状況にある。この点を分析した浦上・小宮(2006)によると、2001年の上位4社の販売シェアは83.9%にもなっている。そして、このような市場集中度の高さは、日本の学生服販売価格が比較的高く維持されていることに、つながっていると考えられる。

浦上・小宮(2006)によると、このような高い市場集中度がもたらされる要因は、大きく以下の4つによるとされる。

第1は、学生服の生産においては、企業に高い営業能力が求められるようになっている、という点である。先にも述べたように、学生服の生産は、学校側から新たな学生服の注文を取ることを起点としており、その役割は製造業者の

営業担当者が担う。競合する企業に先んじて注文をとるためには、学校側の担当者とのコミュニケーションをとりながら、学生服更新のタイミングやニーズをつかむ必要があり、そのための営業活動が欠かせない。特に、近年は学生服のブレザー化が進み、学校ごとに異なるデザインとなるケースが増加しており、営業担当者が学校側と取るコミュニケーションの重要性が高まっている。大手以外の中小製造業者は、このようなマンパワーと必要とする営業力を十分に構築できないために、受注が難しくなり、集中度の上昇につながっていると考えられる。

第2に、学生服の品質とデザインの問題がある。中学・高校を対象とする学生服は、通常3年間を通して1着だけ購入されるケースが多く、さらに高い頻度で着用されるため、家庭での洗濯が可能でありながら、高い耐久性が求められる、という特異な性質が必要とされる。また、近年は学生服のブレザー化が進み、耐久性と共に、ある種のデザイン性が求められるようになってきている。このような必要性を高い次元で満たすためには、継続的な研究開発と生産技術の改善が求められる。このような投資は、中小規模の企業には難しい側面がある。

第3に、製品の流通・販売の点がある。学生服の流通は近年、問屋の衰退から、自社による販売会社や支店を経由した流通が一般的になりつつある。販売先の学校がある地域に、このような施設を整備するためには一定の資金が必要となる。

また、小売店の多くは小規模であり、一般的に大手の製造業者がパワーを持ちやすいと考えられ、その行動を統制することはそれほど難しくない。その結果、中小の競合他社が、このような小売店に食い込むことが難しいことも、大手製造業者の集中度を高めている要因であると考えられる。さらに、小売店への統制は、学生服の販売価格の側面にも及ぶため、学生への販売の時点で値引きが行われる程度も低くなるだろう。

最後には資金の問題が挙げられる。学生服の販売には季節性があり、日本では春に多くの販売がおこなわれることになる。逆に言えば、それ以外の期間に

は販売による収入がないにも関わらず、生産を続ける必要がある。この状況には、ある程度の資金力が必要とされ、逆に資金繰りの苦しい中小製造業者は操業が難しい状況にあるといえるだろう。

このように、日本の学生服産業には、大手製造業者の集中度が高くなりやすい要因が存在している。もちろん、市場シェアの上位を占める大手企業間の競争は激しく行われているものの、彼らは専業の学生服製造業者であり、高い生産技術や営業力をもっている。そのため、どちらかと言えば、非価格競争をおこなっている側面が強いと思われる。その結果、激しい競争の一方で、それほど販売価格は低くならない、という状況が発生していると考えられるのである。

(2) イギリス学生服産業の特徴

では、このような日本の学生服産業の特徴と比較して、イギリスの学生服産業には、どのような特徴を見出すことができるだろうか。先にも述べたように、イギリス学生服産業のサプライチェーンは、小売業者主導となっている。つまり、一般的な小売業者のプライベートブランド (Private Brand; 以下、PB) のように、小売業者が製品の企画やデザインを担い、それらの製造を外部の製造業者に委託する、という形のサプライチェーンが構築されているのである。

この点は、イギリスの学生服産業の歴史と密接な関係があるだろう。学生服は、イートン校のような、いわゆる「エリート校」から普及が始まったために、ある種のステータスを学生服に求める側面があったと想定される。その面から、販売先としての百貨店が重要視され、そこを起点としたサプライチェーンが構築されたと考えられる。先に述べたように、イギリスにおける学生服の普及期において、ハロッズやジョン・ルイスといった百貨店が担った役割は大きかった。また、このような小売業者主導の流れは、その後も引き継がれ、現在では、百貨店だけではなく、テスコやセインズベリーのようなスーパーマーケットでも、学生服の販売がおこなわれている。

このようなサプライチェーン上の特徴があることから、日本の学生服産業が

持つような特徴は発現しにくい状況となり、結果的に市場集中度は上がらず、販売価格の維持がおこなわれにくい状況となる。第1に、小売業者は、一般小売店にしても、百貨店やスーパーマーケットにしても、学生服以外の他製品の販売もおこなっている。よって、日本の学生服産業で製造業者の営業担当者が担うような学校側とのコミュニケーションは、それほど緊密におこなわれるとは考えにくい。よってこの点が、競合他社の参入を防いだり、中規模の小売業者の営業上の問題になったりすることは考えにくい。その結果、多くの小売業者が、ある学校の学生服提供を担うことが可能となるだろう。この結果、販売面での競争に発展しやすいことが想定できる。

第2に、小売業者が製品の企画を担う、ということは、品質やデザインの研究開発や生産技術の改善に継続的に取り組むということは考えにくい。小売業者では他のアパレル製品もPBとして販売していることを考えれば、なるべくそれらの製品との類似性を高め、一括した生産で規模の経済性を達成することへのモチベーションが高く、その分、学生服としての特徴よりは、一般的な衣料品の特徴が全面に出ることになるだろう。この結果、製品の品質は、学生服として日本で求められるような特殊な性質は重視されにくく、多くの小売業者が学生服の販売に関わることを可能としていると考えられる。

また、日本の学生服産業の集中度の高さに関連する第3、第4の点は、サプライチェーンの特徴から見て、イギリスにおける学生服の市場集中度には関係しない。販売場所は、企画者である小売業者自身が担うことになるし、それらの小売業者が低価格販売を標榜しているのであれば、必然的に学生服も低価格となるだろう。日本の学生服のように、販売価格が製造業者に統制されるような側面は想定できない。さらに第4の特徴である資金的な問題については、小売業者の中に多くの大手企業が存在するし、そもそも学生服販売に特化しているわけではないので、サプライチェーンの特徴から、このような問題が集中度を高めることも考えられないといえるだろう。

以上のように、イギリスの学生服産業は、小売業者がサプライチェーンを主導し、①営業面に特化した業者が多くなりにくいこと、②他のアパレル製品と

の類似性を高めるモチベーションが強く、学生服ならではの特徴を出す業者が多くないこと、といった点から、多くの小売業者が、学生服の企画販売に携わることが可能となっている。この結果、価格競争がおり、学生服の販売価格が低く抑えられていると考えられるのである。

V. おわりに

本稿では、特にイギリスと日本における学生服の販売価格差に注目して、その要因を仮説的に検討してきた。先にも述べたように、このような価格差には様々な要因が影響していることが予想されるが、本稿では特にサプライチェーンの特徴に注目し、両国学生服産業のサプライチェーンの特徴の差違が、この価格差につながっていることを指摘した。日本のサプライチェーンが製造業者主導である一方で、イギリスのそれは小売業者主導である。その結果、日本において製造業者の市場集中度を高め、高い販売価格をもたらしている要因がイギリスには存在しない。このことが、両国の学生服価格の差違につながっていると考えられるのである。

ただし、このようなサプライチェーンの特徴の違いが、今後も継続するかどうかについては注意深く観察する必要がある。日本の多くの消費財市場では、小売業者のPB開発が盛んとなり、製造業者がPBの委託生産を引き受ける状況が生まれている。学生服産業にその流れが及ばないとは言いきれない。イギリス型のサプライチェーンの流れが強まれば、日本の学生服製造業者も変化を強いられることになるかもしれない。その点は、今後注意深く観察する必要があるといえるだろう。

謝 辞

本研究の遂行に際して、明石被服興業株式会社社長 河合秀文氏には大きなご助力をいただきました。また本稿の完成前には的確なアドバイスをいただきました。ここに記して感謝いたします。なお、本論文にあり得るべき誤謬は、すべて筆者の責に帰するものです。

参考文献一覧

- Davidson, A. (1990) *Blazers, Badges and Boaters*, Scope Books.
- Ewing, E. (1977) *History of Children's Costume* B. T. Batsford Ltd.
- 小宮一高, 猪口純路 (2009) 「明石被服興業株式会社-産業集積における事業システムの変遷-」『香川大学経済研究所ワーキングペーパー』No. 149.
- Office of Fair Trading (2012) *Supply of school uniforms*.
- 浦上拓也, 小宮一高 (2006) 「スクールユニフォーム業界における市場集中の要因分析」『ファッションビジネス学会論文誌』第11号, pp. 137-146.